

太秦うづまさ広隆寺は洛陽らくやう二条通の西なり。「太秦うづまさは里の名とす。むかし応神天皇おうじんの御宇秦人日本うづまさに來り、蚕をやしなひ、機織をたくみ、帛綿をつくりて、人々の膚をあたゝめ侍りぬ。故に膚を秦はたと訓じて氏を賜り、天皇ふかく賞したまひ、此地をくだし給ひぬ。秦氏はた則秦始皇しんのしくわうの廟を建けるより、太の字をくはへて太秦うづまさと訓けるなり」当時のはじめは、推古天皇十二年八月に、大和国斑鳩宮やまとのくにいかるがみやにて、聖徳太子近臣秦川勝しやうとくたいし はたのかはかつを召て宣ふやうは、我昨夜夢見る、是より遙北のかたに一村あり、楓林繁茂し清香常に薰じ、林中に大なる朽木あり、無量の賢聖諸經の要文を誦し、あるは天童妙花を供し、又木より光を放、微妙の声ありて妙法を演る、今われ彼地に往ん。川勝かはかつは則駕をめぐらして前驅す。其日葛野かどのの大堰に臨んでこれを見給ふに夢の如し、楓林の中に大圀の桂樹あり、異香薰じ、其樹の空虚に奇瑞の宝閣あり、光明赫々として蜂多く集り声を発す、隨身これを払ども尽ず、凡人には蜂と見れども太子は賢聖と見そなはし給ふ。則仮宮を蜂岡ほうかうのもとに造て、川勝かはかつに勅し百濟くだらより奉る仏像を安置し、これを蜂岡寺ほうかうじといふ。「後に広隆寺くわうりうじと改む。広隆ひろたかは川勝かはかつの名なり。以上伝記の大意」

本堂の薬師やくし如来にょらいは向日明神むかふのの御作なり。伝に曰、山州乙訓郡向日明神おとくにごほりむかふのの社前に槁木あり、幾回の年を歴ことをしらず。一日異人來りてこれを伐て仏像を造り、南無医王尊薬師なむい わうそんやくし仏と称し、忽神殿に入て見えす。衆人は是を伝聴て集拜す、しかも靈驗ありて耳目を驚す。同郡大原寺たいげんじ〔日本後記、延暦十三年十二月乙訓社おとくにの仏像を大原寺に遷す〕に智威法師ちゐといふ人唐より來て居住す、社司等しゃしかの僧にあたへければ、都鄙袖をつらねて群詣し、感応ますく新なり。智威ちゐ歿して後丹

後国石作寺いしつくりでらにうつす。其後清和天皇せいわ勅して当寺の本尊とし給ふなり。「待宵小侍まつよひのこじじゆう従この本尊の靈験を蒙る事、源平盛衰

記きにあり」太子堂たいしだうには聖徳王御自作しやうとくわうの（卅三歳）影像を安置す。代々の天子より黄櫨染の御袍、御下襲、表袴、御内着、

石帯等を毎歳贈進し給ふ。「今に至まで一千二百年此例絶ずとなん、什宝に守屋退治の軍配団あり、矢除の団と称す」

地蔵堂じざうだう〔金堂こんだうの西にあり、地蔵尊ちざうそんは道昌大僧正だうしやうの作なり〕鎮守社ちんじゆのやしろ〔三十八所の神を祭る〕閼伽井あかみ〔伊佐羅井ともいふ〕

辨天社べんてんの〔池のひがしにあり。此池は紅蓮多し、炎暑の節盛をなして観とす〕

石灯笼いしどうろう〔太子堂の前にあり、これを太秦形と賞美す。古風を慕ひて模形とするなり〕

土用塚どようづか〔太子堂の西道の中央にあり、太子経王きやうわうを収し所となり〕大酒明神おほさけの〔天照太神てんせうだいじん、八幡宮はちまん、天満天神てんまを祭る、一説

には秦始皇しんのしくわうを崇るとも、又は秦川勝はたのかはかつの靈を祭るともいふ〕桂宮院けいきうゐん〔太子堂の西一町ばかりにあり。八角堂かくだうと称す。推古すゐこ

天皇十二年、太子自土木の功を積で壇を築建給ふ所なり。堂内に三體の本尊を安置す。二臂如意輪觀音にょいりんくわんおん、則太子の御

作なり。阿弥陀仏あみだぶつは隋煬帝ずゐのやうていより推古天皇すゐこへ送り給ふ本尊なり。聖徳太子しやうとくの像御自作にして坐像なり〕祖師堂そしだう〔金堂こんだうの西

南にあり。中央弘法大師ちうあうこうぼう、北は理源大師りげん、南は道昌大僧正だうしやうの像を安置す。又北の間には如意輪觀音にょいりんくわんおんを安置す。毎歳九月

十二日夜戌の刻に牛祭の神事あり、当寺の僧侶五人五大尊の形に表し、異形の面をかけ風流の冠を着し、太刀を佩、壹

人は幣を捧て牛に乗、四人は前後を囲、従者は松明をふり立、行列魏々として本堂の傍より後へ巡り、又西のかたより

祖師堂の前なる壇上に登り、祭文を讀。此文法古代の諺を以て述る、甚だ奇にして諸人耳を驚さずといふ事なし〕

祭 文

夫以、姓を乾坤の氣にうけ、徳を陰陽の間に保、信を專にして仏につかへ、慎をいたして神を敬ふ、天尊地卑の礼をしり、是非得失の品を辨ふる、是偏に神明の広恩なり。因■、単微の幣帛をさ、げ、敬して摩訶また羅神たらしんに奉上册、豈神の恩を蒙ざるべけんや。是によつて四番の大衆等、一切懇切を抽で十抄の儀式をまなび、万人の逸興を催すを以て、おのづから神明の法楽に備へ、諸衆の感歎をなすを以て、暗に神の納受をしらさんとなり。然間、さいづち頭に木冠を戴き、くわひ羅足に旧鼻高をからげつけ、からめ牛に鞍を置、大■をすりむいてかなしむもあり、やさ馬に鈴をつけてをどるもあり、はねるもあり、偏に百鬼夜行に異ならず。如是等の振舞を以て、摩訶また羅神たらしんを敬祭し奉る事、ひとへに天下安穩寺家安泰のためなり。因之永く遠く払ひ退くべきものなり。先は三面の僧房の中にしのび入て、物取る錢盗人め、奇怪すはいふはいや、小童ども木々のなりもの取らんとて、あかり障子打破る、骨なき法師頭もあやうくぞ覚ゆる。扱はあさ腹頓病すはぶき疔瘡ようさう■風、ことには尻瘡虫かさ膿瘡あふみ瘡、冬に向へる大あかゞり、并にひゞいかひ病鼻たりおこり心地具つちさはり伝屍病、しかのみならず、鐘樓しょうろう法華堂ほつくだうのかわづるみ、讒言仲人いさかひ合の中間言貧苦男の入たけり、無能女の隣ありき、又は堂塔の椀皮喰ひぬく大烏小鳥め、聖教やぶる大鼠小鼠め、田の疇うがつうごろもち。如此の奴原において、永く遠く根の国そこの国まではらひしりぞくべきものなり。敬白謹上再拜。

地蔵堂〔太秦ひがしの端にあり、弘法大師の作なり〕古枯社〔太秦の南にあり。向日明神此地へ影向し給ふ、槻木の  
霊を祭る〕